早稲田大学審査学位論文
博士（人間科学）
概要書

外国人患者対応能力向上のための
医療系大学における英語教育の提案

Investigating the Impact of English Education in Healthcare College on Enhancing Communication Skills with Foreign Patients

2024 年　1 月

早稲田大学大学院　人間科学研究科
斎藤　隆枝
SAITO, Takae

研究指導担当教員：保崎　則雄　教授

外国人患者対応能力向上のための医療系大学における英語教育の提案

Investigating the Impact of English Education in Healthcare College on Enhancing Communication Skills with Foreign Patients

斎藤　隆枝（SAITO, Takae）　指導：保崎　則雄教授

１．問題の所在

日本を訪問する，または日本に居住する外国人の増加により，医療提供者が日本語を母語としない患者の対応機会が増えている．一方で大学英語教育は患者対応のための英語力習得には十分ではなかったと感じる医療提供者が多い．筆者が英語教員をしていた医療系大学では学生は入学初年度に英語科目を履修するが，2 年次以降は専門科目や臨床実習が中心となり，学生が優先事項とするのは卒業年度末に受験する国家試験の合格にある．卒業後には英語力が必要になるが，在学中には英語教育は優先されにくいという状況において，看護師やリハビリ関連職種など患者対応の機会が非常に多い対人援助職が学ぶ医療系大学における英語教育の再考は重要な課題である．日本では医学部を中心に English for Medical Purposes(EMP) が普及しているが，本論文では看護師、理学療法士等の医療関係技術者を養成する４年制大学で如何なる教育方法を用いることがより効果的であるのかに焦点を当てる．

２．本論文の目的と構成

本論文では患者対応のための英語力向上を目指す教育方法の検証を行うが，医療提供者は医療通訳や翻訳デバイスなどの多言語対応ツールを適宜用いて正確な言語表現で患者とインフォームドコンセントを試みる必要があるという前提に立つ．同時に挨拶や気遣いの言葉がけ，診療の案内，処置やケアを施す際の指示などに共通語としての英語を用いることは外国人患者との円滑な関係性構築に重要であるという立場を取る．

その上で本論文では患者対応能力向上のための英語教育の提案を試みることを目的とする．研究目的達成のために，まず医療系大学の英語教育の現状と課題を明らかにする調査を行い，研究目的達成に必要となる条件を設定した(2 章)．次に本論文で検証する英語教育方法を選定するために，EMP について整理した後，本論文に関連する教育方法，病院で普及する言語表現を概観した(3 章)．その選定の結果，English Medium Instruction(EMI)の実施状況調査(4 章)と Plain English の教育効果の検証(5 章)を行い，これらの知見から医療系大学における患者対応のための英語力向上を目指す教育方法について提言を行った(6 章)．

３．医療系大学における英語教育の現状と課題

医療系大学における英語教育の状況や学生の英語に対する意識を明らかにすることを目的として 3 つの調査を行った．まず英語科目の設置状況についてランダムに選んだ大学の公式ウェブサイトからカリキュラム体系などを調査した結果，調査対象とした大学全てで 1 年次には英語科目が必修であったが，2 年次で英語科目を必修とする大学はその半分であった(調査 1)．

次に英語科目の履修前後における学生の英語で話すことに対する意識の変化について質問紙を用いて調査をした．その指標には英語で話すか否かは完全に個人の意志に寄る場合，どの程度発話しようと思うかを量る Willingness To Communicate in Foreign Language(FL WTC)スケールを用いた．その結果，1 年次終了時には FL WTC が入学時よりも上昇したが，2 年次終了時には入学時と同じ程度まで WTC が下降した．医療系大学の英語科目履修は学生の話す意識の向上に有効であったが，その教育効果は 1 年以内には消失するようであった(調査 2)．

最後に，WTC 上昇に効果的と考えられる海外研修のようなディープアクティブラーニングの機会がある場合，参加を躊躇する学生はどのような懸念を抱えるかを調査した(調査 3)．その結果，海外研修の参加に積極的ではない理由には「経済的理由」，「英語でのコミュニケーションが不安」，「学科の勉強に支障が出る」が挙げられた．この結果から，医療系大学における英語力向上のための教育方法を検証するに当たり，その方法は実施可能性に加えて以下の条件を満たす必要があることが示唆された．

条件 1: 英語科目履修後から卒業までをつなぐアプローチ．
条件 2: 英語で話す意識の維持向上に効果的であるアプローチ．条件 3:経済的・時間的負荷の少ないアプローチ．

４．本論文に関連する教育方法等の先行研究

EMP は English for Specific Purposes(ESP)の領域で発展している．ESP は学術的アプローチと実務的アプローチの両側面を持つことから、これらの観点に基づいて教育方法を探ることとした．まず学術的アプローチとして英語教育方法ではなく、かつ医療系大学ではあまり実践報告が見られない EMI の導入可能性を調査した．また，英語教育とは異なる視点であるが，医療機関で普及が進む「やさしい日本語」から着想を得て，英語圏で識字能力の差を埋める目的で普及が進む Plain English に焦点を当て，実務的アプローチとしてその教育効果を検証することにした．

５．医療系大学における EMI 実施状況と課題

まず患者対応のための英語力向上のために，学術的アプ

ローチとして EMI 導入の可能性を探った．医療系大学のうちもっとも設置数が多い看護学科を対象として，看護学生が履修可能である EMI 科目の開講有無を全国の医療系大学 287 校を対象として質問紙調査を実施したところ 94 校から回答を得た(調査 4)．その結果 14 校(14.9%)が EMI 科目を開講しており，78 校(83.0%)が未開講であった．未開講の理由には「EMI 実施を検討したことがない」が最も多く，次いで「学生の英語力不足による内容理解不足の懸念」，「EMI 担当教員の確保が困難」が挙げられた．

病院では英語で患者対応の機会が増加しているとはいえ，国家試験のために英語力は現状では不要であり，学生にとって英語力習得は学習の優先事項にはなりにくい．また，専門科目を担当する英語力を持つ教員も少なく，現段階では EMI を医療系大学で実施するインセンティブは低く，EMI 導入は現状では困難であると考えられた．

６．Plain English 導入の検討

次に実務的アプローチとして，英語圏で普及が進む Plain English の教育効果について調査を行った(調査 6)．Plain English は「1 文を短くする」，「身近な語彙を用いる」などのガイドラインに沿って平易な英語表現をすることで伝わりやすさを重視する．調査は医療系大学の 2 年生(40 名)が履修する必修英語科目の一部の時間を利用して英語で患者対応することの意義と必要性，Plain English の紹介，Plain English による患者対応について講義と演習を交えた 60 分の授業を行った．授業前後に外国人患者対応に対する意識や FL WTC を量る質問紙調査を実施した．調査の結果，FL WTC と外国人患者対応に対する意識は比較的強い正の相関関係にあり(r=.65, p<.001)，外国人患者対応に対する意識向上には FL WTC の上昇が寄与することが明らかになった．そして，Plain English の授業後は英語力の高低に関わらず FL WTC が有意に上昇すること，Plain English の教授により学生が英語で話そうとする意識が上昇し，外国人患者対応に積極的になる可能性が示唆された．外国人患者対応に対する学生の意見では，Plain English の授業前は「英語が苦手だから」という消極的な記述が多かったが，授業後には「Plain English なら自分にも話せるかもしれない」など，伝わることを重視した英語表現を使うことに安心感やこれまで培ってきた英語力が実務に応用できうることに充足感を持つような積極的な記述が多くなった．また分析の結果，Plain English は患者や患者家族のような少人数の場でのコミュニケーションに効果的であることも示唆された．

７．研究の総括

それぞれの調査から得た知見を先に設定した３つの条件に照らし合わせて研究の最終総括とした．

条件 1：専門科目を英語で学ぶ機会を設けることになり EMI が導入できれば卒業までの期間を埋める方法となりうる．Plain English は臨床実習前に復習の機会を取り入れることで効果的に患者対応に応用できると考えられる．

条件 2：EMI では授業中の英語コミュニケーションの機会の増加を期待できる．Plain English では FL WTC の上昇が確認された．

条件 3：EMI では留学することなく留学に近い環境を学生に提供できる．Plain English ではこれまでの英語教育で培った英語力を礎に応用が可能と考えられる．

これらの考察から EMI，Plain English ともに医療系大学の英語教育のニーズに応える方法であることが示唆された．この示唆に実現可能性を考慮すると，本論文の結果として外国人患者対応能力向上を目的とした医療系学生の英語力向上のために，現状では実務的アプローチとして Plain English の普及促進を図りつつ，学術的アプローチとして EMI 導入準備を進めることが可能であろうという結論に至った．EMI は専門教育のカリキュラム内での課題であり現状では導入困難と考えられるものの，医療研究の更なる発展により EMI 担当教員の増加も，また実現可能性の増進も期待できる．その間に大学英語教育を実務につなげる方法として，Plain English による患者対応を進めることで，患者の言語背景に関わらず質の高い医療ケアを提供できる対人援助職の養成に助力できると考える．

本論文は医療系大学における英語教育のニーズと課題を明らかにした上で患者対応のための英語力に特化した教育方法の検証を行った現実的な研究である点において社会的意義が高いと考えられる．また，日本で広まりが見られない Plain English の教育効果に着目したことは新規性が高い．本論文の課題としては，第 1 に，検証した教育方法の少なさにある．今後，専門学科教員との更なる連携により，他の教育方法にも視野を広げた柔軟な検証を実現したい．第 2 に，現状で最も効果的であるとした Plain English の導入では，本論文では 40 人の学生に 1 度限りの授業を実施した結果を検証しているに過ぎない点である．Plain English が FL WTC 向上に効果的であることが示唆されたことから，その教育効果の持続期間や授業頻度の検証などを重ねて患者対応に特化した英語教育のカリキュラム構築を試みたい．いずれにしても何が Plain な英語表現であるかということを判断するために基礎的な英語力は必須である．学生がこれまで積み上げてきた英語力を実務につなげるための発展的な教育機会の拡充が強く求められる．